

教諭班グループ別研修

研究テーマ『「幼児期に育てたい力」を育む環境や援助の工夫

～遊びの中にある資質・能力を読みとって～』

学年別グループ協議では、遊びの写真から、子供の育ちや教師の環境構成・援助方法を読み取り、「幼児期の終わりまでに育てたい力(10の姿)」に照らし合わせ協議した。助言者には、具体的な事例を用いて、直ぐに実践につながるような御指導をいただき、研修を深めることができた。

<3歳児>

- ・3歳児なりに友達と同じものやことへの興味が出てくる時期である。楽しかった経験を再現できる材料や場を用意することで、個々の遊びが充実し友達の姿に目が向いていく。個々のやりたい遊びを十分に楽しめるようにしつつ、友達に対して興味をもつ姿を受け止め、子供同士が関わりをもてるようにするための環境構成や援助を工夫することが大切である。
- ・日々の保育の悩みを出し合い解決に向けた話し合いとなったことで、自分の足りない部分を見つめ直すことができた。また、写真の読み取りから多くの育ちを確認したことで、子供の成長を実感することができ、保育を前向きに捉え改善していくきっかけとなった。

～助言者御指導（抜粋）～

- ・3歳児の発達段階として、初めてのことに不安を感じる時期であり、その行動には必ず理由がある。不安そうな子供の気持ちを受け止め、落ち着くまで寄り添い、丁寧に関わりながら、子供がどのような思いを抱いているのかを探っていくことが大切である。また、初めてのことに取り組むときには、保護者に普段の姿や当日予想される姿、園の考えを伝えることも重要である。そして、参加している子供全員が楽しめるように工夫することを大切にしていきたい。
- ・職場にはいろいろな経験年数の教師が集まっているため、人間関係を円滑にするために、まず報告・連絡・相談を大切にしていきたい。思ったことは何でも口に出すことができ、普段から気兼ねなく話せる関係であるためには、疑問に思ったことは自分から聞く、笑顔を大切にすることなどの雰囲気作りをしていくとよい。また、心身の健康のためにリフレッシュすることも大切である。



<4歳児>

- ・友達に言葉や動きで思いを表せるようになってきているが、まだ教師の仲介が必要である。教師は友達同士のつながりを意識できるような言葉掛けをしていくことが大切である。
- ・集団遊びを通して友達との関わりが増えていく中で、ルールを守ろうとしたり、勝敗が分かるようになっていたりする時期である。子供がイメージしやすい題材を集団遊びに取り入れたり、分かりやすいルールを設定したりすることが大切であると学んだ。
- ・4歳児にとってどのような経験が効果的かを考える研修となり、学んだことを実践していきたい。

～助言者御指導（抜粋）～

- ・幼児期は、『できた・できない』ではなく、遊びを通して育つであろう様々な可能性を見極め、ねらいは何か、どんなことをさせたいかを考えて環境を設定することが大切である。
- ・教師は、活動の中にある困難は何か、遊びがどのように展開されていくのか、遊びにどう取り組んでいるのか、何を考えているのかを、子供の視点に立って考えていく必要がある。何も困難がないのではなく、「ちょっと頑張ってみたいな。」「どうしてこうなるのかな。」と、子供自身が考える場や機会を与えることも重要である。
- ・教師が子供のよいところを見付け、声に出しながら積極的に子供に伝えていくことで、子供自身のわくわくすることや好きなことが増えていく。そういった姿が、5歳児になったとき、自分や友達のいいところを見付けたり、苦手なことにもチャレンジしたりする姿につながっていく。



<5歳児>

- ・ねらいを達成するためには、どの子も親しみやすく共通のイメージをもちやすい題材を選んだり、少人数グループで思いを出し合える機会を作ったりすることが大切である。また、共通の目的を達成するためには、進捗状況の伝え合いやグループごとのよさの認め合い、アイデアを周りに伝えるなど、遊びの振り返りが大切であることを確認した。
- ・子供が思いを伝え合えるよう、教師は見守ることが大切だと再認識した。一方で仲介を必要とする場面もあるため、それを見極める力が必要である。
- ・単学級の園が多い中、同じ学年を担当する職員と子供の発達について確認したり、育ちにつながる援助について学んだりすることができた。

<複式学級>

- ・異年齢保育では全学年が同じ活動をしていることが多く、それぞれの学年の発達やねらいをおさえて、環境構成や援助を工夫していくことが必要である。
- ・異年齢保育や少人数保育の共通点を見付けることで、自分の課題を認識することができ、研修を通して保育を振り返ることができた。

～助言者御指導（抜粋）～

- ・時代が進化し、タブレットや YouTube などを通して情報が共有化しやすくなっているため、一人の子供の経験が、協同的な遊びへと広がりやすくなってきている。
- ・少人数学級や複式学級の保育では、各学年の発達の特性をおさえながら、年齢に関係なく遊びが楽しめるような環境の工夫がされている。
- ・職員は日々、全力で子供たちに向き合っているからこそ、物事をプラスに捉えるアンガーマネジメントにより、ストレスをため込まないでほしい。3つのステップである衝動・思考・行動をコントロールする方法を知ること、「怒り」と上手に向き合いながら、円滑な人間関係を保ったり、自分自身の健康を維持したりして保育に取り組んでもらいたい。



<預かり保育グループ>

- ・預かり保育はそれぞれ利用時間にばらつきがあるため、保育の進め方や時間の区切り方に難しさがある。各園で実践している方法を情報交換した。
- ・10月以降は年長児が就学を意識した過ごし方を取り入れている園もあり、各園で実践している活動を情報交換した。
- ・週日案の記録について、日ごとや週ごとなど様々な取組を学んだ。教材や個別の支援方法も情報交換することができたため活かしていきたい。

～助言者御指導（抜粋）～

- ・預かり保育の計画立案は、3学年それぞれの発達を見通して立てる難しさがある。ゆったりとした家庭的な雰囲気の中で過ごし、温かな目で見ていくことが大切である。
- ・子供たちが発達に必要な経験を積み重ねるためには、日々の教材研究が不可欠である。「これ面白そう、やってみようかな。」と思うことがあれば、実践してみることで自分自身への学びにつながる。とはいえ、限られた時間の中で様々な仕事をこなしていくためには、保育だけでなく担任との連携、職員間の情報共有、事務的な作業など、効率よく仕事を進める方法を考え、自分なりのペースを見付けることも必要である。

